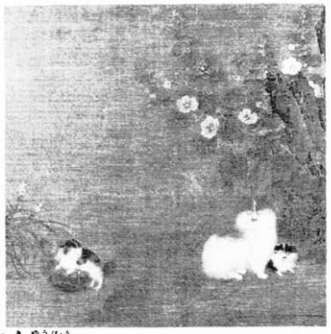
美術の窓(42)

文華苑の春

大和文華館長 吉川逸治



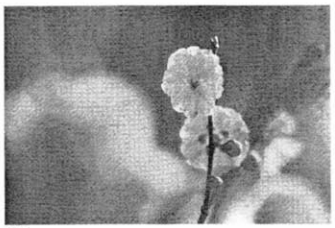
蜀葵遊猫図 伝毛益筆 中国・南宋

暖冬のせいか、文華苑の梅、桃、桜はつぎつぎに春をたたえるよすがにと、蕾ほころばせ、花ひらき、丘辺をおおう草も木も、見なれぬほどの枝、董までさまざまの花をつけ、咲きそろい、げに春の生気のただよいを感じさせます。

花の魅力はあらがいがたしと、嘆じつつ、内外古今の名画家たちに筆をとらせ、墨に、色に、絹や紙のおもてにおのれの感興をしるした大小の画跡がいくつも、本館の蔵品のうちに数えられます。毛益の花の画、「蜀葵遊猫図」、「萱草遊狗図」、田能村竹田の花の画帖、「翰墨随身帖」はなかでも、楽しい喜びを伝えてくれます。

花の可憐な姿は、美しい画帖を染めさせます。花輪、花束は花を集め、ひとの心、ひとの祈願、願望を花に託し、親しさを人々へ、また、神仏へと伝達する役割を象徴します。徽章、記号、紋様となった花は、装飾の世界で、その最も重要な構成要素の一つとして生活文化の担い手に参加します。

— 文華苑　春の花 —

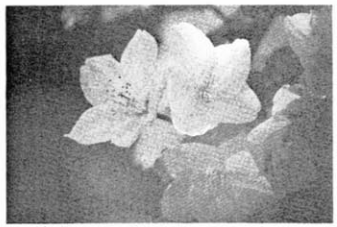


梅

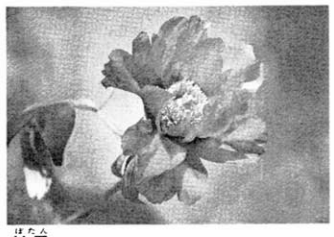
李

菊桃

木蓮



大山桜



牡丹

松梅佳処図(部分)　室町時代

季刊 美のたより No.98
平成4年2月26日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.